

## 《講演者プロフィール》

Dr. Robert Will

(ロバート・ウィル博士)

エジンバラ大学 臨床脳科学センター 国立CJDリサーチ&サーベイランスユニット  
教授 (臨床神経学)

ロバート・ウィル教授は、英国・ケンブリッジ大学にて医学を修了し、長年にわたり、クロイツフェルト・ヤコブ病 (CJD) の研究に従事してきた。1979年から1982年にかけて、オックスフォード大学において、CJDの疫学に関する研究プロジェクトを実施した後、英国CJDサーベイランスユニットを立ち上げ10年間にわたりユニット長を務めた。現在も同ユニット (現在は国立CJDリサーチ&サーベイランスユニットに改名) で、顧問神経科医を務めている。

CJDに関する数多くの論文を執筆しており、変異型CJDの同定や解析、また輸血を通じた伝播が起こることの発見に関与している。

Dr. James Hope

(ジェームス・ホープ博士)

英国動植物衛生庁 TSE部長 (首席研究員)

伝染性牛海綿状脳症、スクレイピー及びクロイツフェルト・ヤコブ病の分子学的側面に関する専門家である。

1973年にインペリアル・カレッジ・ロンドンを卒業後、同大学にて修士号を取得。その後、英国・聖バーソロミュー病院メディカル・スクールにて分子内分泌学の博士号を取得した。

1984年より、英国バイオテクノロジー・生物科学研究会議 (BBSRC) の研究所に勤務し、プリオンたんぱく質の構造や機能に関する研究チームを立ち上げた。2002年に英国獣医学研究所 (VLA、現：英国動植物衛生庁 (APHA)) のTSEプログラム・マネージャーに就任し、2012年より現職。

同博士は、TSEについて、英国政府、EU、OIE、WHOのアドバイザーをつとめるとともに、2003年から2012年まで欧州食品安全機関 (EFSA) のパネルメンバーを務めた。

毛利 資郎  
(Dr. Shirou Mohri)  
東北大学 客員教授

鹿児島大学大学院農学研究科獣医学専攻を終了後、九州大学在職中に立石潤教授のもとで実験動物を用いたプリオンの感染性について研究を開始し、宿主のプリオン蛋白質遺伝子以外の遺伝的背景が潜伏期間に影響を及ぼすことを明らかにし、博士号（医学博士；九州大学）を取得した。

1990年から客員研究員として英国バイオテクノロジー・生物科学研究会議（BBSRC）動物衛生研究所（現エジンバラ大学：ロスリン研究所）で、当時大流行していた牛海綿状脳症（BSE）の診断法について研究。

佐賀医科大学医学部助教授を経て、1995年から九州大学医学部教授、2000年から九州大学大学院医学研究院教授（附属動物実験施設施設長併任）。

2006年より、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所プリオン病研究センター、センター長として研究のマネジメントを行うと同時に、内閣府食品安全委員会プリオン専門調査会の専門委員を勤めた。

2013年より現職、原点に戻ってプリオンの感染性についての研究を行うと共に、農林水産省食料・農業・農村政策審議会家畜衛生部会プリオン病小委員会委員長、農林水産省食料・農業・農村政策審議会臨時委員、厚生労働省食品衛生分科会伝達性海綿状脳症対策部会部会長、厚生労働省薬事・食品衛生審議会委員などを務めている。